

# 情報構造の原則を英語教育にいかに応用するか

伊原 巧

## Applying the Principle of Information Structure to English Teaching

Takumi IHARA

### I. はじめに

人間が一度に二つの音声を出せないことが言語の線状性を運命づけることになった。従って言語の構造も、この線状性に沿う形で形成されてきたと考えてよい。そこで、伝達されるべき命題的内容を、この線状性に沿う形で一文に写像する仕組みが統語構造である、とするならば、伝達されるべき話題を、この線状性に沿う形でいくつかの文に分けて写像する仕組みは談話構造である、としてもよい。

ところが、この話題がまともな談話構造をもつと認められるには、そこに全体の一貫したまとまりがなければならない。さらに、この全体的統括性を支えるものとして、局所的統括性とも言うべき、発話(文)間の連続性や結束性がなければならない。

この局所的統括性については、Halliday & Hasan (1976)<sup>1)</sup> や Dijk (1977)<sup>2)</sup> 等に優れた研究があるが、本稿では、まず、彼らを取り上げている諸概念の中でも、局所的統括性に最も深く関わっていると思われる情報構造を取り上げ、その概念を英語の例を通して明確にし、関係諸概念との関連も考察する。次に、この考察結果を踏まえ、情報構造の原則をどのように応用すれば、英語学習で引き起こしやすい問題の解決がはかれるのかを考察する。

### II. 情報構造

言語による伝達行為が成立する必要条件として、話者の話す内容の中に、原則的に、聞き手にとって新しい情報であると、話者が判断しているものが含まれていなければならない。もしも話者が、聞き手の既知の情報に関する査定を見誤り、聞き手の全部知っていることを話し始めると、たいていの場合、その誤った査定は、何らかの形で訂正をうけることになるであろう。

しかし、逆に、話者の話す内容が、聞き手にとって何の脈絡もない全く新しい情報であるとする、その内容は、くり返しを求められるか、言い替えを求められることになり、それでも見当のつかない場合には、「わからない」との判断を下されることになるであろう。このことは、聞き手にとって新しい情報というものが、聞き手がある程度知っていることについての新しい情報でなければならないということを教えてくれていることになり、従って、伝達行為が必要かつ十分に成立するためには、既知の情報と新しい情報の二つが関係し合っ

ていなければならないということがわかる。

次に、ある発話の中に、この二つの情報を担う要素が存在するとした場合、どちらの要素が先に現われるかという問題がある。これは無標の場合、既知の情報を担う要素が先に現われ、新しい情報を担う要素がその後が続くのが普通であると言える。このことは、我々の学習過程を見れば分かるように、既習知識をとっかかりとして、その既習知識に新知識を付加していくことで学習が容易に進むのと平行的であると思われる。

このように、言語表現の線状的な流れの中で、ある発話は、既に聞き手に知られていると話者が判断する部分に、聞き手に知られていない、あるいは新たに呈示しようと話者が判断する部分を加えることで進行すると捉えることもできる。発話のこのような側面を、ここでは情報構造と呼ぶことにする<sup>3)</sup>。

なお、既知の情報とか新しい情報というのは、誰にとってのものであり、その判断は、誰によってなされるものであるかということ、あらためて明確にしておく必要がある。伝達内容が専ら話者によって与えられるものである以上、話者にとっては、すべてが既知である。ということは、既知の情報とか新しい情報というものは、すべて聞き手にとってのものであり、また、その判断は、伝達内容をすでに知っている話者にとって一方的になされるもの、ということになる。

### III. 旧情報と新情報

これまでは、既に聞き手に知られていると話者が判断する部分を既知の情報と呼び、聞き手に知られていない、あるいは新たに呈示しようと話者が判断する部分を新しい情報と呼んできた。これからの概念をより正確に把握するために、まず Chafe の定義を見てみよう<sup>4)</sup>。

Now, typically it is the case that the speaker assumes that some of the information he is communicating is new ; it is information he is introducing into the hearer's mind for the first time. But typically it is also the case that some of the information in the sentences is not new. Some of it is information which the speaker and hearer already share at the time the sentence is spoken. This shared information constitutes a kind of starting point based on concepts already "in the air," to which the new information can be related. The old information may be shared from the common environment in which both the speaker and the hearer are interacting. Frequently it is also shared on the basis of sentences already uttered, in which case we might say that the common environment has been created linguistically.

また、Halliday & Hasan は次のように述べている<sup>5)</sup>。

One of these is INFORMATION structure, which is the ordering of the text, independently of its construction in terms of sentences, clauses and the like, into units of information on the basis of the distinction into GIVEN and NEW : what the speaker is treating as information that is recoverable to the hearer (given) and what he is treating as non-recoverable (new).

要するに、二人に共通して言えることは、発話における言語的・非言語的脈絡から、話者と聞き手の間で了解されている内容を旧（既知）情報とし、了解されていない内容を新情報としているということである。ところが、発話における言語的・非言語的脈絡から、話者と聞き手の間で了解されている内容というのは、後続する発話の前提となり得る内容のことであり、了解されていない内容というのは、先行する発話で聞き手によって特定化されていない内容のことであり、これは後続する発話で話者がその発話の焦点として断定する内容のことだと言ってもよい。そうだとすれば、旧情報とは前提をさし、新情報とは焦点をさすと考えてはばよいと思われる<sup>6)</sup>。これを例示すると(1)のようになる。

(1) Whom did John hit ?

John hit	Mary.
旧情報	新情報
	焦 点

John hit someone.
前 提

ところで、(2)を見ると一つの疑問が生じる。

(2) Who is taller, John or Tom ?

John is.

(2)の前提は Either of John and Tom is taller than the other. なので、応答文の John は新情報となる。ところが、この John は先行文脈ですでに話題にのぼっているので、話者と聞き手の間で了解されているはずの要素である。すなわち、この John は新情報だが旧情報とも解されるのではないかとの疑問が生じる。

この疑問を解決するには、先に述べた「言語的・非言語的脈絡から話者と聞き手の間で了解されているか否か」の概念をさらに分化して考える必要がある。すなわち、旧・新情報という概念を、「すでに話題にのぼっているか否か」の概念、つまり「既知」か「未知」かの概念とは峻別して理解することが必要となる。そう考えると、応答文の John は既知項目で新情報だということになる。既知項目であっても、新情報を担うことがあるのである。旧・新情報という概念を、例えば、この場合の John というような構成要素に絶対的に適用する概念として捉えるのではなく、言語的・非言語的脈絡との関わりによって決定される相対概念として捉えるからである。このようなことを明確にした旧・新情報の定義に、久野 (1973)<sup>7)</sup>、安井 (1978)<sup>8)</sup>、村田 (1982)<sup>9)</sup>、等があるが、ここでは次のように定義することにする。

旧情報：言語的・非言語的脈絡から聞き手が推論できるものと話者が思っている情報。

新情報：言語的・非言語的脈絡から聞き手が推論できないものと話者が思っている情報。

さて、旧・新情報を情報価値的に見た場合、旧情報より新情報の方が情報価値が高い。このことは、旧情報は、通例、代用形で表現されやすいということからわかるし、また、例えば、(1)の反応文が Mary だけでも伝達機能が成立することからもわかる。さらに、省略の可能性という点から見ると、新情報は省略できないが、旧情報は省略可能ということにもなる。

また、II章で触れるところのあった旧情報から新情報への流れという点から見れば、旧情報と新情報は、一文の内部の述べられるもの（主題）と述べるもの（題述）との関わりにお

いて捉えることもできる。述べられる事柄とは、何のことについて述べられようとしているのか、聞き手が推論できるものでなければならず、述べる事柄とは、聞き手が推論できないものか、あるいは、推論できないものを含んでいるものでなければならない。換言すれば、旧情報は主題を含んでおり、新情報は題述に含まれていることになる。このことを先に述べた前提と焦点との関わりも含めて明示しなおすと(3)のようになる。

(3) Whom did John hit ?

John hit Mary.

主題	題述
旧情報	新情報
	焦点

John hit someone.

前提

新情報が題述に含まれていると言う場合、英語に最も特徴的なのは文末焦点の原則であろう。文中新情報を表わす最も情報価値の高い構成要素が文末にひきのばされるというこの原則は、音声的には、文末の開いたクラスの要素か名詞に音調の核を伴う形で表わされ<sup>10)</sup>、この場合の音調核を無標の音調核と呼ぶことにする。

(4) a. What's on today?

NEW

We're going to the races.

b. What's are we doing today ?

NEW

We're going to the races.

c. Where are we doing today ?

NEW

We're going to the races.<sup>11)</sup>

(4)の例からわかることは、文末の race に無標の音調核が与えられると、この場合、それを含む三通りの言語単位が新情報を担い、その数だけ意味解釈のあいまい性も生じるということである。これを丸括弧でくくると次のようになる。

(5) (We're (going (to the races.)))

(5)を見ると、この意味解釈のあいまい性の中に、新情報を担う確率の順次性をみることができる。すなわち、丸括弧の中には、文末の要素がいずれの場合にも含まれており、それは常に新情報を担う。そして、あと、順次、文頭に近い要素ほど新情報である度合いが低くなる、ということである。このことは裏を返せば、文頭の要素ほど旧情報を担いやすくなるということにもなる。

このように、旧情報を担う要素が文頭に来るように、新情報を担う要素が文末に来るように、一文の内部で機能する法則が文末焦点の原則の本質であると思われるが、これは、本来、先行文脈との関わりから生じるはずの旧から新への流れを、一文の内部から保証してくれている法則であるとも言え、この両者には裏表一体の関係があるとも言えよう。

ところで、(4)の例文は文末焦点の原則に沿った文であり、これらはいずれも無標と言える

が、その中でも(4a)のように、新情報の広がり文全体に及んだ場合、それは何の前提も含まない、純粋に中立的な情報の焦点の場合であり<sup>12)</sup>、最も無標になる。ところが、同じ無標の場合でも、(4b)と(4c)には旧から新への情報の流れが見られるのに対し、新情報のみからなる(4a)にはこの流れが見られない。この矛盾は、旧から新への情報の流れには発話上ゼロの旧情報が存在する場合があると考えerことで説明がつく。II章でふれるところがあったように、何の脈絡もない全くの新情報だけでは伝達行為は成立しない。新情報だけからなる発話にも、その発話が生じる前提であるはずであり、その前提が発話上旧情報を担う要素として現われず、ゼロの旧情報として存在する場合は、新情報だけからなる発話だと考えるのである。事実、(4a)の質問文には「今日何かがある」という前提があり、それが発話上ゼロの旧情報になることによって、(4a)の応答文における旧から新への情報の流れが保たれていると考えられる。従って、先に(4a)は「何の前提も含まない」と述べたのは、発話上含まないという意味である。そして、発話上ゼロの旧情報が存在すると久野(1973)<sup>13)</sup>、の言う「中立叙述」の解釈をうけ、そうでない場合には「主題」の解釈をうけることになる。

このように、文末焦点の原則に沿った無標の場合、情報は旧から新へ流れる構造をもつと結論してもよく、ここに発話間の連続性や結束性を支える基本構造を見ることができる。

ところが、文末焦点の原則に反して、文末の開いたクラスの要素が普通名詞以外の要素に音調核がきて、その要素が新情報になる場合があり、それは、通例、対比的意味をもたらす<sup>14)</sup>。このような音調核をここでは有標の音調核と呼ぶことにする。

(6) Who hit Mary ?

Jöhn hit Mary.  
新情報 旧情報

(7) John appeased Mary, didn't he ?

John hit Mary.  
旧情報 新情報 旧情報

(6)(7)の応答文を見ると、有標の音調核が与えられると旧から新への情報の流れの原則に反して、新から旧への情報の流れが生じていることがわかる。しかし、これは有標の音調核が文末焦点の要素より前に位置する要素にくる場合のことであって、例えば、(8)のように文末焦点の要素の直後の代名詞や前置詞といった閉じたクラスの要素にくる場合はこの限りではない。

(8) He was speaking to hër. (not to you)

新情報 新情報

このことから、有標の音調核がおちた場合には、情報の流れに一定の原則が見られないということになる。ところが、(6)(7)(8)を見ればわかるように、これらは無標構文の配列に有標の音調核がおちた場合のことであり、これらの無標構文を有標構文に転換すれば、旧から新への情報の流れが保たれる場合がある。例えば、(6)の質問文には「誰かがメアリーをなぐった」ことが前提としてあるので、応答文のJohnは新情報で、hit Maryは旧情報であるのに、Johnは主題として文頭にきており、hit Maryは題述として文の後位にきている。そこでこのJohnを新情報を担う要素本来の位置である文末に置き、hit Maryを旧情報を担う要素



#### IV. 情報構造の原則の応用

発話間の連続性に関わる情報構造は、本来、談話文法の領域で扱われる。しかし、学習指導要領で取扱いの対象となっている言語材料は、すべて文文法で扱われる項目であり、情報構造は学校文法の対象外となっている。しかし、III章で見たように、文文法で扱われる変形操作のいくつかが発話間の連続性の必要に呼応した一文内の変形操作であるのなら、情報構造の原則が学校文法へ関わってはいけない理由はない。近年の言語の科学的研究の成果にはめざましいものがあるにもかかわらず、それらを十分に取り入れてないために引き起こされると思われる誤りがいくつか見うけられる。そこで、ここでは、英語学習において生徒が引き起こしやすい問題点と与格移動と受動化の場合に求め、情報構造の原則をどのように応用すればその解決がはかれるのかを考察してみよう。

##### 1. 問題点

与格移動は、教育現場で第3文型と第4文型の書きかえ練習としてよく行われている。

(12) a. I gave the doll to Jane.

b. I gave Jane the doll.

(13) a. Mother bought a watch for him.

b. Mother bought him a watch.

生徒は上の a. b. の双方の書きかえを求められるのだが、その際の主眼はどういった前置詞が用いられるのかということにあり、あとは対応する二つの表現を等号で結び、一対一の対応関係があると理解することで終わる。こういった実態に接する時、次の二点が問題点として浮かび上がってくる。まず、書きかえられた文の適不適格性が閑却されていること、次に、それぞれの使い方が教えられないため、実際の言語使用で誤った使い方がなされる可能性があるということである。例えば、生徒は (14a) から、単独の文としても不適切な (14b) を導き出すことも予測できる。

(14) a. I gave the doll to a girl.

b. ?? I gave a girl the doll.

また、単独の文として適格な (15b) を次のような実際の言語使用において、(15b') のように誤って使用することもあり得る。

(15) a. What did you do with the doll?

b. I gave the doll to Jane.

b'. \*I gave Jane the doll.

これらの不適格性は、いずれも、旧から新への情報の流れの原則に反しているためである。

受動化についても同様のことが言える。受動化は、教育現場で能動文を受動文に書きかえる練習としてよく行われる。その典型的な例をあげてみよう。

(16) a. Jone hit the dog.

b. The dog was hit by John.

生徒は上の a. b. の双方をいわゆる「たすき掛け」のルールによって書きかえるわけだが、

その際、主として動詞が他動詞か否かに注意を向けさせられ、あとは対応する二つの表現に  
 相関関係があると理解することで終わる。こういった実態に接すると、第3文型と第4文型  
 の場合と同じく、書きかえられた文の適不適格性の閑却、および実際の言語使用における誤  
 った使い方の可能性、といった二つの問題点が浮かび上がってくる。例えば、生徒は(17a)、  
 (18a)から、単独の文としても不適格な(17b)、(18b)を導き出すことも予測できる。

(17) a. John hit a dog.

b. ?? A dog was hit by John.

(18) a. I scolded Mary yesterday.

b. ?? Mary was scolded by me yesterday.<sup>(19)</sup>

また、次のような実際の言語使用において誤った使用がなされることもあり得る。

(19) ?? John went into the room and Mary was found there by him.

受身文の主語は、通例、旧情報でなければならない。(17b)の不適格性はこれに反している  
 ためである。またby以下は、通例、新情報であるため、(18b)はこれに反している。さら  
 に(19)の不適格性は、主題は統一されなければならないのに、S<sub>1</sub>の主題のJohnがS<sub>2</sub>に旧  
 情報として引き継がれず、新情報の主題MaryがS<sub>2</sub>に現われているためである。すなわち、  
 これらいずれの不適性も、旧から新への情報の流れの原則に反しているためだと言える。

## 2. 応用例

上で見た誤りの原因はどこにあるのかというと、英語教育の場において、文法に関わる  
 言語材料しか扱われないために、書きかえ後の文の適不適格性や、その運用に関わる知識が  
 閑却されてきたためである。そもそも書きかえ可能な二つの構文が今なお存在するというこ  
 とは、機能や運用に違いがあるからである。従って書きかえ練習をさせる場合には、機能や  
 運用に関わる知識も説明し、それらを視野に入れた書きかえ練習を行っていくことも必要と  
 なる。そこで、ここでは、意味ある文脈を設定し、旧から新への情報の流れの原則に注意を  
 向けさせながら書きかえを行っていく練習例を示してみよう。

まず第3文型と第4文型の書きかえ練習では、次のように問題を設定すれば、生徒は文相  
 互のかかわりに注意を向けて書きかえを行っていく。

( )内の語を用いて文を続けてみよう。

a. What did you give Mary?

I gave \_\_\_\_\_ . (a doll)

b. Whom did you buy the doll for?

I bought \_\_\_\_\_ . (Mary)

c. John showed his new watch to Mary.

Then he showed \_\_\_\_\_ , too. (his new camera)

d. Mary told me a very funny story.

So I told \_\_\_\_\_ . (John)

e. What did you do with the watch?

I \_\_\_\_\_ . (gave, John)

この正解は（ ）内の語が文相互のかかわりから新情報となるので、それらが文末に位置するよう、第3文型か第4文型かを選択しながら書いていくことになる。

次に能動文を受動文に書きかえる練習でも、次のように問題を設定すれば、生徒は文相互のかかわりに注意を向けて書きかえを行なっていく。

( )内の語句を使い、例にならって下線上に文を続けてみよう。

例) Does your father use this bike?

No, he doesn't use this one. It is used by my mother. (my mother)

a. Does everybody love this song?

No, everybody doesn't love this one. \_\_\_\_\_ . (young people)

b. Did John build these houses?

No, he didn't build these ones. \_\_\_\_\_ . (that carpenter)

生徒は、文相互のかかわりから、this one と these ones が次の文で旧情報をになり主語のIt と They となり、( )内の語がby 以下の新情報となるよう、受身文を書いていくことになる。さらに、別の類例も示しておこう。

( )内の語句を使い、例にならって下線上に文を続けてみよう。

例) What did your father do? (broke, window)

He broke a window.

What happened to the window?

It was broken by my father.

a. What did Tom and John do? (painted, wall)

\_\_\_\_\_ .

What happened to the wall?

\_\_\_\_\_ .

b. What did your sister do? (washed, my shirt)

\_\_\_\_\_ .

What happened to your shirt?

\_\_\_\_\_ .

例えば情報構造の原則をこのように応用した練習問題を豊富に介在させていけば、従来の機械的な練習問題から生じる誤りはかなり減るのではないだろうか。

## V. 結 語

情報構造の概念を、言語的非言語的脈絡によって決定される関係概念と捉え、そこから推論され得る情報を旧情報とし、推論され得ない情報を新情報と定義した。次に、無標の場合、情報は旧から新に流れる原則をもつことを、文末焦点の原則との関わりの中で説明した。また、この原則が一定しない有標の場合でも、統語的手段によってこの原則が保たれる場合があることもみた。

次に、教育現場でよく行われてきた一文レベルの書きかえ練習では、旧から新への情報の

流れの原則に反する不適格文を生む恐れがあることを、第3文型と第4文型の書きかえと能動文から受動文への書きかえの場合を例にとりて指摘し、その対応例をあげてみた。

これらの対応例をさらに工夫・改善していけば、従来の英語学習においてよくみられた誤りはかなり改善されるものと思われる。しかし、この対応例に限界があることも指摘しておかなければならない。情報構造の原則は、一文のレベルを越えた談話のレベルに属するものではあるが、あくまでもそのレベルの言語形式の結末性 (cohesion) に関わるものである。その意味で、情報構造を応用した練習問題も、従来の文法に関わる練習問題と同じく、言語用法 (language usage<sup>20)</sup> の域を越えるものではない。言語形式の結束性が談話の一貫性 (coherence) を保証するための一手段であるように、言語形式の結束性に習熟させるこの練習問題は、言語使用 (language use) を達成させるための一助にすぎないということである。今後、言語使用能力、すなわち伝達能力を育成していくためには、いかなる練習をいかに組み合わせればよいのか。学際的研究の成果と、それを応用した創造的な練習問題の出現が期待されるところである。

#### 註および参考文献

- 1) Halliday, M. A. K. and R. Hasam, 1976. *Cohesion in English*, Longman.
- 2) Van Dijk, T. A., 1977. *Text and Context*, Longman.
- 3) 茂呂雄二 1984 「テキスト・談話論の用語」『言語生活』No.393 筑摩書房
- 4) Chafe, W. L., 1970. *Meaning and the Structure of Language*, The Univ. of Chicago, pp. 210-211.
- 5) 註1)の文献の27頁。
- 6) 柴谷 他 (1982『言語の構造 意味・統語篇』くろしお出版 106頁)は、新情報の中で或る要素が特別に際立った新情報要素(特に言いたいこと)を表わすことがあり、それを焦点と捉えている。すなわち、焦点は新情報に含まれる要素であるとしているが、ここでは焦点という概念を、前提という概念と対をなす概念と捉えておくことにする。
- 7) 久野 暉 1973 『日本文法研究』大修館 209頁。
- 8) 安井 稔 1978 『新しい聞き手の文法』大修館 184頁。
- 9) 村田勇三郎 1982 『機能英文法』大修館 185頁。
- 10) Quirk, R. et al., 1972. *A Grammar of Contemporary English*, Longman, p. 938.
- 11) 註10)の文献の940頁。
- 12) 註10)の文献の940頁。
- 13) 註7)の文献の27-35頁及び207-218頁。
- 14) 註10)の文献の939頁参照。
- 15) (7)の応答文を分裂文にすることはできない。安井(1978 88頁)によれば、「叙述されるもの」と「叙述するもの」との両極を求めれば、名詞(性の強いもの)と動詞(性の強いもの)ということになり、分裂文の焦点にくることが期待されているのは、叙述されるものであるのだから、少なくとも、名詞性の強いものがそこに生ずるのは極めて自然であり、また、この位置に動詞性の強いもの、あるいは、動詞と最も密接に結びついているものが生ずるのは、そもそもありえないことであるからだとしている。
- 16) (10)の応答文は自然度がやや低い。この場合、Maryを有標の主題にしなくても、無標の主

題のまま表現できる構文があるからである。次の受身形がそれである。

Mary was hit by John.

- 17) 註9)の文献の209頁。
- 18) 第3文型が基本形で第4文型がその派生形であるとする統語論的根拠については、例えば中澤和夫(1981 「与格構文について」『英語学』24号 大修館 56-83頁)を参照。
- 19) 高見健一 1982 「中・高・大生の受身文における errors とその原因—意味論的, 語用論的な観点から—」『中部地区英語教育学会紀要12』 62頁。
- 20) この用語は、以下の language use とともに、H. G. Winndowson (1978. *Teaching English as Communication*, Oxford Univ.) による。

(1991年8月23日 受理)